

第26回 渋谷の午後のコンサート。

2025.6.8(日)14:00開演 Bunkamura オーチャードホール
Sun. June 8, 2025, 14:00 at Bunkamura Orchard Hall

第38回 平日の午後のコンサート。

2025.6.9(月)14:00開演 東京オペラシティ コンサートホール
Mon. June 9, 2025, 14:00 at Tokyo Opera City Concert Hall

〈コバケン、200歳を祝う〉 (Kobaken celebrates the 200th anniversary of the Composer's Birth)

指揮とお話 小林研一郎 Ken-ichiro Kobayashi, conductor & speaker

ナビゲーター 朝岡 聡 Satoshi Asaoka, navigator

コンサートマスター 近藤 薫 Kaoru Kondo, concertmaster

J. シュトラウスII: ワルツ『春の声』(約7分)

J. Strauss II: Waltz "Frühlingsstimmen" (ca. 7 min)

J. シュトラウスII & ヨーゼフ・シュトラウス: ピッツィカート・ポルカ (約3分)

J. Strauss II & Josef Strauss: Pizzicato-Polka (ca. 3 min)

J. シュトラウスII: ワルツ『美しく青きドナウ』(約10分)

J. Strauss II: Waltz "An der schönen, blauen Donau" (ca. 10 min)

〈J. シュトラウスII生誕200年〉

<200th anniversary of the birth of J. Strauss II>

— 休憩 intermission —

ベートーヴェン: 交響曲第6番『田園』(約40分)

Beethoven: Symphony No. 6 "Pastorale" (ca. 40 min)

主催:公益財団法人 東京フィルハーモニー交響楽団 / Presented by Tokyo Philharmonic Orchestra

助成:文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術等総合支援事業(公演創造活動)) | 独立行政法人日本芸術文化振興会

Subsidized by the Agency for Cultural Affairs Government of Japan | Japan Arts Council

協力: Bunkamura (6/8) / In Association with Bunkamura (June 8)

◎すべてのお客様に、快適にお楽しみいただくために ♪本公演は全席指定です。指定のお席にご着席ください。演奏開始間際の入場の際にはスタッフの案内で入場券記載とは異なる席への着席をお願いすることがございます。♪演奏中のご入場は、固くお断りいたします。楽章間のご入場は楽曲の進行によりスタッフがご案内いたします。入場しただけの場合もさせていただきますのでご了承ください。♪曲間・楽章間での退場につきましては、体調に不安がある場合など、無理せずご判断ください。その際、周りのお客様の鑑賞の妨げとならぬよう、ご配慮いただければ幸いです。♪演奏中に、時計やスマートフォンのアラーム音等が鳴らないよう、いま一度ご確認ください。♪演奏は最後の余韻まで余さずお楽しみください。早すぎる拍手や声援は他のお客様の鑑賞の妨げとなる場合がございますので、ご配慮くださいますようお願いいたします。

♪ All seats are reserved. Late admittance will be refused during the live performance. If you enter or reenter just before the concert or between movements, we may escort you to a seat different from the one to which you were originally assigned. ♪ Exiting during the performance will be tolerated. If you do not feel well, please exit or enter as you need. However, please mind the other listeners so that they will be minimally disturbed. ♪ Please refrain from using your cellphone or other electronic devices during performance. ♪ Please cherish the "afterglow" at the end of each piece for a moment before your applause.

6/8

渋谷の
午後の「コンサート」

6/9

平日の
午後の「コンサート」

出演者プロフィール

指揮とお話 小林研一郎

Ken-ichiro Kobayashi, conductor & speaker

“炎のコバケン”の愛称で親しまれる日本を代表する指揮者。東京藝術大学作曲科、及び指揮科の両科を卒業。1974年 第1回ブタペスト国際指揮者コンクール第一位、及び特別賞を受賞。2002年ブラハの春音楽祭では東洋人初のオープニング「わが祖国」を指揮して万雷の拍手を浴びた。これまでにハンガリー国立フィル、チェコ・フィル、アーネム・フィル、ロイヤル・コンサートヘボウ管、フランス国立放送フィル、ローマ・サンタ・チェチーリア国立管、ロンドン・フィル、ハンガリー放送響、N響、読響、日本フィル、都響等の名立たるオーケストラと共演を重ね、数多くのポジションを歴任。ハンガリー政府よりハンガリー国大十字功労勲章(同国で最高位)等、国内では旭日中綬章、文化庁長官表彰、恩賜賞・日本芸術院賞等を受賞。2005年、社会貢献を目的としたオーケストラ「コバケンとその仲間たちオーケストラ」を設立、以来全国にて活動を続けている。CD、DVDはオクタヴィア・レコードより多数リリース。現在、日本フィル桂冠名誉指揮者、ハンガリー国立フィル・名古屋フィル・群響桂冠指揮者、読売日響特別客演指揮者、九響名誉客演指揮者、東京藝術大学・東京音楽大学・リスト音楽院名誉教授、ローム ミュージック ファンデーション評議員等を務める。

オフィシャル・ホームページ：<https://maestro-kobaken.com/>



©山本倫子

司会 朝岡聡 Satoshi Asaoka, navigator

慶應義塾大学卒業。テレビ朝日にアナウンサーとして入社し、各種スポーツ中継のほか「ニュースステーション」初代スポーツキャスターとして活躍。フリーとなつてからはテレビ・ラジオ・CMのほか、クラシックコンサートの企画構成や司会でもコンサート・ソムリエとして活動のフィールドを広げている。とくにオペラと古楽ではユニークな評論が注目を集めており、クラシックの語り部としても幅広く活動中。興味深い内容を軽妙な語り口で展開する独自の世界は、新しい芸術ファンのすそ野を広げる司会者として注目と信頼を集めている。日本ロッシーニ協会副会長。東京藝術大学客員教授。日本音楽教育文化振興会理事。



プログラム・ノート

解説=飯尾洋一

「ワルツ王」の生誕200年を寿ぐ

ヨハン・シュトラウス2世は1825年、ウィーン生まれ。今年、生誕200年を迎えます。ウィンナワルツの傑作を数多く残したことから「ワルツ王」の愛称で知られています。自らヴァイオリンを弾きながら自作を指揮する華麗なスタイルで人気を博しました。「2世」と付くのは、同姓同名の父、ヨハン・シュトラウス1世も同じように音楽家として活躍したため。という、仲睦まじい音楽一家の姿を思い浮かべるかもしれませんが、実はそうではありません。父は息子が音楽家になることを許さず、息子の活動を妨害するほどでしたが、やがて才能豊かな息子は頭角を現し、父子それぞれが楽団を率いてライバルとして激しく争ったのです。父が世を去ると、息子は父の楽団を自らの楽団に吸収して、さらなる飛躍を遂げました。

ヨハン・シュトラウス2世が生まれた頃、ベートーヴェンはまだ存命でした。ベートーヴェンもまたウィーンで活躍した作曲家です。交響曲第6番『田園』の着想源となったのが、ウィーンの森。自然とともに過ごす喜びがオーケストラによって綴られます。



マエストロ小林が生誕200年を迎えたJ. シュトラウスIIの人気曲と『田園』でウィーンの自然へと誘います

春の喜びを伝える傑作ワルツ

ヨハン・シュトラウス2世(1825-1899)のワルツの中でもとりわけ高い人気を誇る作品が、本日演奏される『春の声』と『美しく青きドナウ』の2曲。『春の声』は1883年に作曲されました。当初、この曲はソプラノ付きのワルツとして発表されます。歌ったのは当時、ウィーン宮廷オペラで人気を誇っていたピアンカ・ピアンキ。青空にひばりが舞い上がり、そよ風が吹き、つらい冬が終わって春が到来し、幸せな気分になる……。そんな歌詞が歌われていました。期待に反して初演は大成功には至らなかったようですが、その後、1886年のロシアツアーで評判を呼び、以後、作曲者の代表作のひとつになりました。

現在では歌のないバージョンで演奏されることがほとんど。言葉がなくとも、冒頭のはずむようなリズムから、春が来た喜びが伝わってくるのではないのでしょうか。ひらひらと宙を舞うようなワルツが優雅に奏でられます。流麗なワルツはやがて愁いを帯びた表情を見せますが、ふたたび推進力を増し、最後はふたたび喜びを爆発させます。



ピツィカート奏法で紡ぐ軽快なメロディ

弦楽器にはふたつのタイプがあります。ひとつは弦を弓でこすって弾くタイプの擦弦楽器きつげん。ヴァイオリンやヴィオラ、チェロ、コントラバスが該当します。もうひとつは弦をはじいて音を出す撥弦楽器はつげん。ギターや三味線、箏などが該当します。「でも、ヴァイオリンなど擦弦楽器の弦をはじいても音が出るのでは?」と思う方もいらっしゃるでしょう。まさしくそれが「ピツィカート奏法」です。弓を使わず、指で「ポン!」とはじくことで、シャープで軽やかな音を出すことができます。

1869年、ロシアツアーでパヴロフスクへ赴いたヨハン・シュトラウス2世と、弟のヨーゼフ・シュトラウス(1827-1870)は、弦楽器のピツィカートで曲を作ったらおもしろいのではないかと思いつきます。この旅先でのアイデアから生まれたのが、兄弟で合作したといわれる「ピツィカート・ポルカ」。軽快なメロディがピツィカートで奏でられ、中間部では鉄琴が加わります。



ウィンナワルツの代名詞

毎年、お正月の「ウィーン・フィル・ニューイヤー・コンサート」では、ヨハン・シュトラウス2世の作品が何曲も演奏されますが、プログラムに『美しく青きドナウ』の曲名が載ることはありません。なぜなら、アンコールで必ず演奏されるから。『美しく青きドナウ』はヨハン・シュトラウス2世の代表作であるばかりか、ウィンナワルツの代名詞といってもよいでしょう。

初演は1867年。当時、ウィーンの人たちは、ドイツ統一をめぐるプロイセンとの戦争に敗れたために意気消沈していました。そんな市民を元気づけようとして書かれたのが『美しく青きドナウ』です。「ウィーンっ子のみんな、陽気にやろうぜ！ 悲しんだってしょうがない。愉快地に過ごそう！」。そんな歌詞を添えて、男声合唱付きのワルツとして発表されました。初演では作曲者が期待したほどの反響を得られませんでした。同年のパリ万博で合唱を省いたオーケストラのみの版を演奏すると大成功を収めます。以後、この曲は広く親しまれるようになり、現在では「オーストリア第2の国歌」とも呼ばれています。

ウィーンを訪れたことのある方は見たことがあるかもしれませんが、実際のドナウ川はまったく青くありません。都市部を流れる川は青くないのが普通であり、作曲当時も青くはなかったでしょう。しかし、このワルツの雄大でロマンティックな曲想を聴けば、『美しく青きドナウ』という曲名がふさわしいと思えるのではないのでしょうか。



人間の感情表現を盛り込んだ自然描写

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770-1827)は日課として散歩を欠かさなかったといえます。ウィーンの森を散歩することで、創作のインスピレーションを得ていたのでしょう。1808年に完成された交響曲第6番『田園』には、自然がもたらす喜びがオーケストラによ



6/8

渋谷の「コンサート」

6/9

平田の「コンサート」

て表現されています。楽譜には「田園交響曲、あるいは田舎の生活の思い出。絵画というよりも感情の表出」と記されています。

自然を題材に交響曲を書くというアイデアは、決してベートーヴェン独自のものではありません。一説によれば、当時60作以上もの「田園交響曲」が書かれたとか。たとえば、クネヒトという作曲家は、ベートーヴェンに先んじて「自然の音楽的描写」という全5楽章からなる作品を書いています。各楽章にはベートーヴェンの『田園』とよく似た標題が添えら



ユスティン・クネヒト
(1752-1817)

れており、この作品がベートーヴェンにヒントを与えた可能性は高そうです。しかし、ベートーヴェンが書いた交響曲は単なる自然の描写に留まるものではありません。自然と向き合う人間の内面にわきあがる、豊かな感情表現を盛り込んだところに真価があります。

第1楽章「田舎に着いたときの愉快的気分」アレグロ・マ・ノン・トロppo 穏やかでくつろいだ表情の主題が風光明媚な田園風景を想起させます。

第2楽章「小川のほとり」アンダンテ・モルト・モート 流れるようなメロディはまるで小川のせせらぎのよう。終盤には小鳥たちが登場します。フルートがナイチンゲール、オーボエがウズラ、クラリネットがカッコウの鳴き声を模倣します。

第3楽章「田舎の人たちの楽しい集い」アレグロ 喜びがはじけるカントリー風の愉快的ダンス。第3楽章から第5楽章までは切れ目なく続きます。

第4楽章「雷と嵐」アレグロ 不吉な遠雷が低弦でほのめかされます。ピッコロ、ティンパニ、トロンボーンが加わって、猛烈な嵐を表現します。

第5楽章「牧歌、嵐の後の喜びと感謝」アレグレット やがて嵐が去り、穏やかな天候が戻ります。感謝の念とともに、陶然とした喜びの牧歌が奏でられます。

いいお・よういち(音楽ジャーナリスト)／著書に『クラシック音楽のトリセツ』(SB新書)、『R40のクラシック』(廣済堂新書)、『マンガで教養 はじめてのクラシック』監修(朝日新聞出版)、『クラシックBOOK』(三笠書房)他。雑誌やウェブ、コンサート・プログラム等に幅広く執筆する。テレビ朝日「題名のない音楽会」他、放送でも活動。